

令和 5 年 5 月 26 日現在

機関番号：12601  
 研究種目：奨励研究  
 研究期間：2022～2022  
 課題番号：22H04063  
 研究課題名 独唱歌唱からPassaggioに着目したUna voce探究-個別最適な歌唱指導-

## 研究代表者

滝沢 健作 (Takizawa, Kensaku)

東京大学・大学院教育学研究科(教育学部)・教諭

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 350,000円

研究成果の概要：普通科高校音楽の受講生徒を対象とし「個別最適な学び」に向けた視点で個人で歌う「独唱」に特化し声楽の「Passaggio」の概念を理解又は感受させ一人ずつ異なる自身の声の多様性を体感させ「主体的・対話的で深い学び」の実現に向かった。通常授業時間内で三か国語(日伊仏)の独唱歌を題材にし、個人レッスン時間を設定し専門的なレッスンを通して自身の声と向き合い声楽と発声の奥深さを体感し受講生同士の主体的・対話的で深い学びが実現された。生徒自ら難曲であるBeethoven交響曲9番の第4楽章を独唱付きで行いたいとあり本校音楽祭で抜粋演奏を披露出来た。本研究の報告を本校紀要の東大附属論集第66号に投稿した。

## 研究成果の学術的意義や社会的意義

歌唱活動の核である合唱活動がコロナ禍で敬遠されている中での歌唱活動の継続と文科省が掲げる「個別最適な学び」に向けた視点で「独唱」に特化し声楽の「Passaggio」(パッサッジョと読み声楽歌唱に於ける声の変換点の事を言う)の概念を理解又は感受させ「主体的・対話的で深い学び」の実現に向かった。三か国語(日伊仏)の独唱歌を題材にし個人レッスンを通常授業に取り入れた事が本研究の最大の特徴でそれを体感する事により自身の声と向き合い歌唱活動への強い興味関心や奥深さ探求心を生みその後の高度な自発的な音楽活動に向かった。多様な言語に接する事で多彩な文化背景を学び生涯音楽を愛する心を育む事にもつながった。

研究分野：音楽教育学

キーワード：個別最適な学び 主体的・対話的で深い学び 歌唱指導 Passaggio 歌唱活動 声楽発声 多様性 多言語

## 1. 研究の目的

(1) コロナ禍以降中等教育音楽の歌唱活動の核である合唱活動が敬遠されて来た中での歌唱活動の継続として、文科省が掲げる「個別最適な学び」に向けた視点において個人で歌う「独唱」に特化し、個別の歌唱に於いて声楽の「Passaggio」(パッサッジョと読み声楽歌唱に於ける声の変換点の事を言う)の概念を理解又は感受させ一人ずつ異なる自身の声(Una voce)の奥深さや多様な個性を体感させ「主体的・対話的で深い学び」に向かう授業研究が本研究の核である。

(2) 普通科の高校選択音楽 受講生徒を対象にし、集団授業の中に 15 分程度の声楽個人レッスンを導入し、教師と生徒との対話も通して歌唱し、生徒が自分自身の声と向き合う事で、集団で歌唱する合唱とは異なる発声と表現の学びを体感させる。

(3) 東京大学教育学部附属学校で日頃から各教科で行われている「協働的な学び」に活かされる「個別最適な学び」の実践研究を行う。

## 2. 研究成果

(1) 協働的な学びを軸にした本校において本研究の「個別最適な学び」の実践は異色であり生徒に相当のインパクトを与えた。集団授業のなかで声楽の「個人レッスン」を取り入れる事で授業そのものに新鮮さが生まれ、教員と生徒との対話がある事で、本来向かって欲しい学びの方向性を明確に示すことができた。生徒自身も抽象的になりやすい乗り越えられない疑問点を言語で伝える事の難しさと自身のパフォーマンスとの差異に向き合い、良く考え、感受し、繰り返す事の重要性を体感していた。個人レッスンは音楽室隣の音楽教室内で行われたが、その時音楽室では個別の学習時間となるが、そこで生徒同士の歌唱活動に関する対話、例えば「レッスンどうだった?どんな事言われた?」「自分はこう言われたけどどう思う?」等の対話生まれ、お互い声を出し聞きあい、切磋琢磨する状況が生まれていた。その時間の音楽室の空間では教師は存在せず、教師の目がない所で自分達のペースでの緩やかな探究的時間が生まれた事も重要であった。

(2) Passaggioに関して、プロ歌手でも難しい概念の理解と感受は容易では無かったが、Passaggioの位置が個人によって異なる事や、その箇所を乗り越える事の課題設定は、曲を仕上げるプロセスにおいて興味関心が生まれ有効だった。今回教科書掲載の三か国語による歌曲を課題曲にしたが、日本語の弘田の「浜千鳥」は丁度男声Passaggioの音域(bミ)に最高音の連続音が記されており、その理由によって歌唱が容易でないという理解が生まれた。フランス語歌唱のFauréの「Après un rêve」は、鑑賞時に旋律の美しさを味わうと同時に自身のPassaggioであろう音域に注目して聴くなどの着眼点の幅が生まれた。イタリア語のBelliniの「Vaga luna」に関しては作品として美しい旋律を保ちつつPassaggioの問題点が起きにくい旋律構造になっている事が、歌いやすさと心地よさがある事を感じていた。全ての楽曲において歌唱時に上手く行かない箇所の理由が、Passaggioの音域が明確になる指針となり例えば「自分には出来ない」「ただ難しい」というネガティブで抽象的な感想でなく、そこには何かしらの理由や原因があるのではないかという考えに向かった。探究的な深い学びの糸口につながる事によって生徒対生徒と教師で主体的・対話的な深い学びが実現した。

(3) 当初予定の無かった、Beethoven作曲の「交響曲第9番第4楽章合唱付き」独唱箇所を入れて抜粋演奏し披露する機会が持てた。この「第9」の最も有名なFreude, schöner Götterfunken ~の合唱部分を歌う事は可能であると思ったが、独唱箇所を入れるとなると突如ハードルが高くなる。日本では年間を通して「第9」演奏会が催され、沢山の市民が第9の合唱を歌う習慣があるが、独唱箇所はプロ歌手でも歌唱が困難なものであり「第9」を上演する場合、市民合唱団が合唱パートを歌うとしても独唱者はプロ歌手に頼まざるえない。それを高校生が「挑戦してみたい」との欲求が生まれた事は喜ばしい出来事であった。今回は抜粋演奏であったが生徒達の今後更にオリジナルを目指すという目標が出来たこと、基本的に授業内で終わらせようとしていた事が、生徒の主体性によって授業から飛び出し、このような展開を見せたことで音楽を生涯愛する心を育んだという事が本研究の一番の成果であった。そしてなにより結果的に日伊仏独の4か国語の声楽作品に触れる事が出来たことは、これからの国際社会に向けて音楽によって多言語に接し、その音楽的様式感の違いから多彩な文化の多様性を自身の身体で歌声を通して実感した事は、物事を捉えるうえでの新しい視点の発見や価値観の遭遇にもつながり中等教育の音楽教科の価値や必要性、可能性を更に実感した。

主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 滝沢 健作	4. 巻 第66号
2. 論文標題 中高生男声クラシック発声分析 2022 - 第 32 回日本クラシック音楽コンクール 声楽部門男声の部全国大会審査を終えて -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東大附属論集	6. 最初と最後の頁 162 182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

東大附属論集66号リンク <a href="https://www.hs.p.u-tokyo.ac.jp/wp-content/uploads/2023/04/Bulletin_66.pdf#page=162">https://www.hs.p.u-tokyo.ac.jp/wp-content/uploads/2023/04/Bulletin_66.pdf#page=162</a>
---

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名
----	--------